

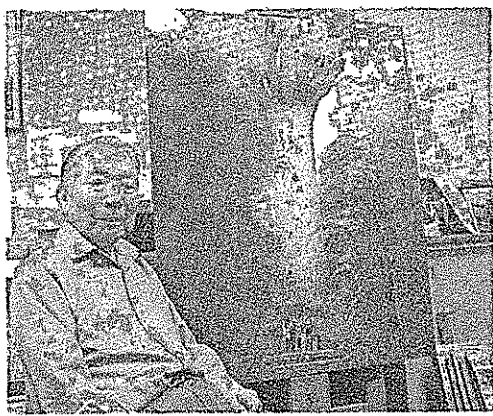
証言



戦争

中国で敗戦、シベリア抑留

画家の保科 誠さん(91)



右は、樹高51mのタネマフタの巨木(ニュージーランド)

東京・葛飾区の保科誠さん(91)は16歳で北海道から上京、工場などで働き、敗戦間近に召集されました。旧満州(中国東北部)で敗戦を迎え、4年のシベリア抑留を体験。70年後のいま、安倍政権が戦争法を強行した姿に「10代だったころの日本が重なる。戦争法を廃止させよう」と意欲

を燃やします。

陰惨ないじめも

1945年4月に入隊、旧ソ連国境に近い旧満州の

まこま 1924年生まれ。日本美術家連盟会員。パン・グラディッシュ・日本新極美術館館長。

戦争こそ環境破壊の元凶

牡丹江近くに陸軍航空隊の通信兵として配属されました。「上官の命令は天皇の命令」と絶対服従で、初年兵へのいじめは陰惨でした。「言葉がつかまってしま

う、きつ音を責められ、井戸に身を投げた初年兵のことが忘れられません」

8月9日、ソ連軍が国境を越えて侵攻。国境沿いの通信隊から情報を得ていた関東軍(旧日本陸軍)の高

級将校らは妻子を連れ、鉄道などを総動員して真っ先に逃げました。残された通信隊には「わずかな銃と一人二つの手りゅう弾だけ」。ソ連軍の機銃掃射を浴びながら逃げる途中、関東軍の若い兵が爆弾を腹に巻いて敵の戦車に飛び込む場面を目撃。「ほとんどが戦車に行き着く前に撃たれた」といいます。同16日、ソ連軍に武装解除されました。集結した大部隊に感染症がまん延。

「日本に帰れる」といわれ、移動中、保科さんもデング熱にかかり、高熱でもうろうとなり脱落、一人と

り残されました。襲撃を避けて昼は林や畑に隠れ、夜、星を見て必死に歩き、1カ月半ほど遅れて奇跡的に部隊に合流。畑から盗んだトウモロコシや赤カブに救われたといえます。

抑留恐怖の日々

抑留されたシベリアは零下30、40度は当たり前前地の。森林伐採や、鉄道建設のため凍った地面を掘らさ

れました。過酷な重労働に加え、日本人将校たちに食料をピンハネされ、下級兵士らはわずかな黒パンと塩水のようなスープだけ。寒さとシラミの大群、栄養失調、ネズミまで食べて下痢、いつ殺されるかという恐怖の日々。半年ほどで初年兵の3分の1が命を落としました。「階級制撤廃、

全員が仕事を、食べものを公平にと声上がり、たまたかって実現させた」と話します。

「人が人でなくなり、殺されないために見境なく相手を殺す。これが戦争です」と保科さん。「戦争法も原発再稼働も、背後には死の商人がいる。かつて私自身、何も知らず国のために身をささげたいと軍隊にいった。いまこそ世界と日本の動きをしっかりと見て悲惨な歴史を二度と繰り返さないでほしい」

帰国後、工場を営む傍ら、診療所設立など多くの民主運動に参加。現在は「この美しい地球をいつまでも」をテーマに森林、巨木を描き続けています。「自然環境破壊の現況は最悪で、まさに生命の危急存亡の危機です。戦争こそが自然破壊の元凶である」とを心から訴えたい」

(西口友紀恵)